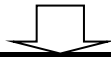


【2】行動分析および【3】支援例

平成 年 月 日 () 年 組 番 氏名

⑦	不注意さがある場合
行動分析	1 生活リズムの乱れや脳機能に起因した覚醒レベルの低下があり、周囲の刺激に影響されやすくなり、注意がそれてしまう
	2 学業、その他の場面で細やかな注意ができず、不注意な過ちを犯す
	3 順序立てて物事を考えられない、指示をやり遂げられない
	4 長い時間の注意の持続が困難である
	5 全ての情報が聞き取れず、よく知っている言葉、聞き覚えのある言葉など一部の情報ですぐ判断してしまう



支援例	ア 早寝早起き、朝食、睡眠、適度な運動、適切な栄養を摂るなど生活のリズムを整えるよう家庭の協力を得る
	イ やるべきことを一覧表に書き、行うべきことを時系列に並べて優先順位を付けさせる
	ウ 一つの作業が終わるごとに必ず確認する習慣を付けさせる
	エ 多くの課題に取り組ませるときは、質、量、時間に配慮する
	オ 注意が散漫にならないように、不要なものは机や教室から片付ける
	カ 連絡事項など必ずメモを取るよう習慣付けさせる

⑧	落ち着きのなさがある場合(多動・運動過多)
行動分析	1 じっとしていることが苦手で、いつもそわそわしている
	2 多様な刺激を整理するのが苦手である
	3 見通しを持って行動できない
	4 新しい刺激を求めて、次々と興味・関心が移っていく



支援例	ア 座席を教師の前や教室の中央にし、適宜言葉を掛けるようにする
	イ 見通しを持たせるために内容、方法、時間、手順などをあらかじめ知らせる
	ウ 授業の妨げにならない程度の行動は許容する
	エ 多動性を無理に押さえようとせず、授業中に小休止を設定したり、ストレッチ体操などを取り入れたりする
	オ 生徒に完璧な態度を求め過ぎない
	カ プリントを配付する係を任せるなど、体を動かす活動を取り入れる
	キ 休み時間などに十分体を動かす場面を設定する
	ク 対象となる生徒の行動特性を理解している生徒を隣に座らせる
	ケ 指導するときは生徒の人格や個性についてではなく、その行動について指導する
	コ 他の生徒の前で指導をしない
	サ 指導するときは生徒の人格を傷つけるような言葉や皮肉を避ける
	シ 困った行動をとっても感情的にならず、穏やかに理論的に解決する方法を提案する
	ス 机の上を整頓し、授業で必要な物だけ置くようにさせる

⑨	衝動性が強い場合
行動分析	1 後先考えずに思いつきで行動してしまう
	2 集中できる時間が短い
	3 自分の行動を客観的に振り返るのが難しいため、状況を理解して適切な行動をとるのが難しい
	4 他者の視点に立ったり、場の雰囲気を読んだりすることが苦手で、協調性に欠ける
	5 感情のコントロールが難しい



支援例	ア 望ましい行為、定着させたい行為は紙に書いて見える所に張っておくなど、生徒の理解のレベルにあわせて提示する
	イ 不適切な言動を示した場合は自ら気付くことができるように個別の指導をする
	ウ 不適切な表現をした場合、代わりとなる表現の仕方を教える
	エ ささいなことはできるだけ許容して、よい場面があればその場で認める
	オ 行動のルールや約束を前もって一緒に決め、約束が守れた時はそのことを評価する
	カ ルールはできるだけ明確で、生徒に合わせてできるものにする
	キ できごとを図示して、適切な言動を考えさせる